

舵を切る



文福永無想

第十七回 命を賭けた建白書

明治19（1886）年6月、アメリカから禁酒運動を叫ぶメリーレビット夫人が来日することになった。レビット夫人の講演会では2つの条件の申し出があった。一つは講演の聴衆は女性に限ること。もう一つは通訳は日本人女性であることだ。実は、このことには深い理由が込められていた。そして当日、会場には600人ほどの女性が集まつた。

「女性らは「国が滅びる、子どもたちが滅びる」と泣きながら訴えました。そして驚くことに、ヒルズボロの町の全ての酒屋が閉店を余儀なくされたのです。そして、こうした女性たちの姿がアメリカ中に伝えられると、禁酒運動の波が湧き起きました」

東京キリスト教婦人矯風会の発足から3年  
が経つた明治22年。その日楫子は白無垢に身  
を包み、ふところには懐剣を忍ばせていた。た  
だ事ではない出で立ちである。

「夫一婦の建白書を献上することは、お上に  
抗議申し上げることでもあります。これより、  
自害の覚悟を持つて参ります」

院に向かつた。一夫多妻制に物申すことは、女性の人権を訴えることでもあつた。楫子は過去に、鈴木要介との間に子どもをもうけたが、妾にはならなかつた。それは鈴木の妻を苦しめることであり、男に頼る生き方を選ばなかつたのだ。こうした女性の思いや、婚外子を産む立場など、当時の社会は理解しようとはしなかつた。何より、女性には自由や平等という言葉は縁遠いものだつたのだ。

それらを訴える桐子らの主張には、大きな危険をはらんでいた。それは明治天皇の側室制度

は根底から批判することだったからだ。しかし反応はすぐに表れた。東京朝日新聞は、楫子らの行動を「どうして女性だけの手に任せるべき課題であろうか」と社説で取り上げたのだ。そして楫子らの抗議から9年後の明治31年、民法により一夫一婦制度が確立することになるのだった。

とはいってもこの制度が社会に根付いていくの

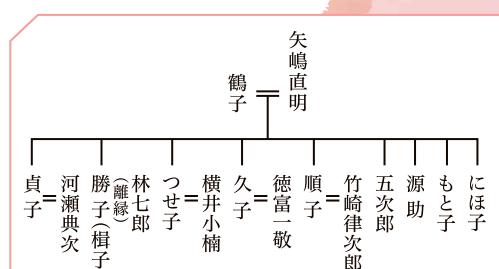
とはいっても、この制度が社会に根付いていくのはそれよりずっと先のこと。女性の解放問題やは

はそれよりずっと先のこと。女性の解放問題や教育など、楫子の前には多くのものがまだまだ

山積みであつた

つかつた渡瀬かめは、懸命に彼女の言葉を伝えようとした。

られた「矯風」とは「悪い風習・風俗を改め正す」という意味であった。



四賢婦人記念館

益城町杉堂1250 電話/286-4959  
開館/9時30分～16時30分 休館/月曜(祝日の場合は翌日)  
入館料/一般・高校生200円(160円)、小中学生100円(80円)  
※(1)～(4)以上の図書割引料金